

ウエグナーのディテールのこだわり、家具の注目すべきポイント。

彼の場合、優れた技術に裏打ちされた知見、そして高い感性によって、合理的かつ論理的な美しいディテールが生まれております。

例えば、肘掛の先端部の形状とか、あるいはそういった肘掛の部分と脚との接合部にあえて薄く浅い切り込みを入れて、そうすることによって材の収縮によって接合部のわずかな段差が発生してもそれを目立たせないような工夫、こういったこともウエグナーさんの椅子には多く見られる。面白い工夫だと思います。

ウエグナーと素材（特に木材）および構法との関係

木という材料の素材特性をウエグナーさんほど知り抜いた人ってというのはあまりいないでしょう。それは幼い頃から木彫に興味を抱き、そしてその彫刻をすることで非常に高い表現力を身につけました。

道具と材料の関係性についても非常に熟知しており、そうした背景がそれぞれの樹種に合致した、極めて強度の高い構造が生まれたわけです。いわば理にかなった構造ということが言えると思います。

PP モブラー訪問時のウエグナーの様子。デザイナー、職人の二つの顔について感じさせるエピソードがあれば。

ハンス・ウエグナーさんは職人の顔と、それからデザイナーとしての顔、この2つの顔を持つ。この2つのどちらに対しても本当に秀でた才能をお持ちの方でした。職人の側からのいろんな提案もウエグナーさんは職人出身というデザイナーですから、素直にアドバイスを聞き入れて、より良いものを生み出していくことに専念されたんでしょう。

デザイナーと家具職人が共通言語で対等に話ができるという、そういうフラットな環境が名作を生み出したんだなということを痛感した思い出があります。

ウエグナーデザインの特徴、ウエグナーが他のデザイナーと比べて特に優れていると思える部分はどこか。

ハンス・ウエグナーさんというのは、持って生まれた美意識と、そして非常に優れた感性に基づく造形力、そして彼は非常に研究熱心な人でした。そして過去の作品というものを否定することなく、過去の作品に学ぶという姿勢が常にありました。そういう何100年も前に生まれたものに対してリスペクトを持って接して、そこから現代に通じる普遍性、そういったものを汲み取って、自分のデザインの中にそれを生かしていったんですね。これはデンマークのコア・クリント。近代家具デザインの父と言われた方ですけれども、このクリントの教えとも非常に近いんですね。直接の教え子ではなかったんですけども、そうしたクリントの教えというものをウエグナーさんも実践していた方です。

過去の中のもの、現代生活に通じるような良い部分を、そういったものを汲み取って自分のデザインに反映させて自身のデザインを昇華させ、ブラッシュアップささしていくということで、非常に多くのバリエーションモデルを生み出し、その中でまたこれまでにない非常にユニークなオリジナリティ溢れるデザインを数多く生み出しました。

1本の木があって、それがどんどんどんいろんな方向に枝分かれをしていって、だけど根っこのところでは全部一つになってるというようなデザインを系統立てた木になぞらえると、見事な大樹になりますね。

ウエグナーの椅子はなぜロングライフのデザインだと思いますか？

ウェグナーさんの場合は、その家具マイスターとしての知見に基づく確かなデザイン、そしてアイデアからプロトタイプ製品までのプロセスが極めて時間をかけて吟味をして開発をするわけですね。

ですから、開発の時間イコール寿命の長さにつながっているということは、これは多分間違いがないと思います。ウェグナーさんは本当に時間をかけて吟味をして、少しずつ問題点を見いだしては改善し、そうやってより完成度の高いものに近づけていくわけです。

毎日毎日それを眺めながら、どうすればもっと良くなるかっていう、そういう、常に使う側の立場に立って改善点を模索し、解決し、そして非常に完成度の高いものに到達していく、そういう取り組みをずっと生涯続けた方だったと思います。

ウェグナーと日本文化との繋がりや影響はあると思いますか？

ハンス・ウェグナーさんの家に参りますと、特にリビングルームには日本のものが結構たくさんあるんですね。最初に入った時には驚きました。リビングのメインの照明は日本の提灯でしたし、それから壁には東北地方の雪から体を守る蓑と言われるもの、そういうものがオブジェとして飾られておりました。

また、棚の上には京都の33間堂の漆塗りの丸いお盆が飾られていたり、それから東北地方のこけしも何台もありました。

それから、書棚の中にはですね私の学生時代の恩師でもあったんですけども、写真家の岩宮武二さんの形という本がありました。これは2冊ともに揃った形でありました。その形の中で紹介されているのは日本の伝統工芸品ばかりです。そういうところにウェグナー皆さんは大変共感をされていたと思います。

そんなふうに日本の伝統工芸に携わる職人さんとウェグナーさんの職人としての魂の部分が、本当に共鳴し合っていたんじゃないかなと。そういうことが感じられるような。ウェグナー展の中にもそういったものがたくさんあります。

織田先生にとってウェグナーはどんな存在ですか？

ウェグナーさんに関しましては、特に私を研究者として認めてくださったというのが自分の中では一つの誇りとして持っております。

ある日突然、ハンス・ウェグナーさんからサークルチェアが送られてきて、研究のためにぜひ役に立ててほしいということでした。いろんな形で交流がありました。今回の展覧会にも展示しております。原寸図面もウェグナーさんからいただいたものです。8回お会いしましたので、そのいずれの場合もいろんな思い出がございます。そういったことが椅子を日常生活の中で使い、そして彼の椅子っていうのは、手の指といいますか、指の先端にある人間独特のセンサーがありまして、それで、なぞることで彼のデザインの素晴らしさということを実感体感することもできるわけです。本当に自分の人生の中でウェグナーさんというのは大きな部分を占めております。